

2018年度 研究センター事業報告書

| | |
|---------|---------------|
| 研究センター名 | 地域健康社会学研究センター |
|---------|---------------|

I. 研究成果の概要（公開項目） ※1ページ以内にまとめること

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこないできるだけわかりやすく記述してください。

1. 地域健康社会学プロジェクト研究の推進

寄付研究プロジェクト（2016年4月発足）時の主旨を引き継ぎ、住民の参加・協働による地域健康創出をめざす基礎的研究、歴史・実践研究、現状分析・方法開発の総合的な研究を行った。予防要因分析を通して政策構築に資する疫学研究の手法を用いて健康創出の社会的課題を明らかにするとともに、次の諸課題にわけて研究を推進した。

- ①京都における地域健康の歴史と実践
- ②福島の経験にもとづく地域健康づくりの現代的課題の追究
- ③地域健康社会学の創出と総合人間学の基礎的研究

2018年度の主な取り組みとしては、当センター主催で公開シンポジウム「医師 早川一光を語る会～西陣の医療から総合人間学へ～」を2018年12月に開催した。戦後日本を代表する医療者であり、2018年6月に94歳で亡くなった医師・早川一光氏の掲げた「総合人間学」の学術的な意味を改めて問い、その志を引き継ぐ会とした。本学生存学研究センター（当時）協力のもと、立岩真也センター長の講演やパネルディスカッション等を通して、学内外の研究者・医療関係者等により闊達な意見交換が行われるとともに、活気を伴ったネットワーク形成の場となった。

また、同じく同年12月には、医療・福祉問題研究会、ジェンダー・セクシュアリティ研究会と当センターの共催で、研究会「アメリカにおけるリプロダクティブヘルス サービスへのアクセスと低所得者へのケア価値観・宗教・国民の間にある神話の影響」を実施した。その中で、医療関連法を専門とするノースカロライナ大学公衆衛生大学院・ディーン・ハリス教授を招聘し、米国の医療機構、特に低所得者へのケアとリプロダクティブ・ヘルスの問題について講演会を開催した。トランプ政権下におけるアメリカのヘルスケア制度の現状とその根幹にある問題について、歴史的背景を含めつつ検討する重要な機会となり、こちらも闊達な意見交換、研究者交流に繋がった。

2. 外部資金獲得の推進

センターの運営資金として寄附金を保有するほか、厚生労働行政推進調査事業費等を獲得している。また、個別の研究課題推進のため、科研費への申請も積極的に行った。センター長の早川が滋賀医科大学との共同研究を行い、疫学、公衆衛生学の観点から地域医療の可能性を模索するとともに、産学官連携や外部資金の獲得を見据えた研究を行った。また、今年度センター長の早川が滋賀県との協議をすすめ、2019年度には滋賀県の健康福祉データの分析について、滋賀県健康医療福祉部からの受託研究を行うことが決定しており、科研費をはじめとした外部資金の申請・獲得を積極的に推進することで、研究活動をより幅広く展開することを可能とした。

3. メディア媒体を使用した発信及び社会貢献

研究所ウェブサイト、ソーシャルメディアにおける積極的な発信を行うとともに、各メディアの特性を生かした独自の情報発信についても工夫や分析を行い、より効果的な情報発信に努めた。

また、2016年7月より取り組んでいる地元ラジオ局の番組について、2018年度からは放送拠点を京都三条ラジオカフェに移し、引き続き小学生目線で観た地域の高齢者への作文を発信した。これらの作文を蓄積し、また、地域における高齢者の存在意義を抽出していくことで、高齢者・子ども・地域の役割を明らかにし、地域社会への貢献と研究素材の抽出を相互に行った。また、ラジオ番組での取組みを契機に小学生への授業を行い、日本の高齢化問題に対する相互理解を深めた。これらの成果発信を通じて、放送の対象である地域社会への直接的効果はもとより、間接的に他の地域社会への貢献も可能とした。

4. その他研究活動とその展開

滋賀県は全国平均寿命都道府県ランキングで日本有数の長寿県である。2017年度より、滋賀県衛生科学センターから「滋賀県データ活用事業プロジェクト会議」メンバー（座長）の就任依頼を受け、健康や医療、介護など滋賀県健康寿命延伸のための各種データを一体的に分析・活用し、市町や件における予防的な取組みの推進を図っている。

また、全国保健師長会研修や各県の国民健康保険連合会にて、「地域に責任を持った保健活動の強化」をテーマとして講師を務めるなど、各種団体における講演依頼や委員委嘱依頼を積極的に受け、研究の今後の展開につなげている。

II. 拠点構成員の一覧

本欄には、2019年3月31日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③大学院生、④日本学術振興会特別研究員(PD・RPD)

| 役割 | 氏名 | 所属 | 職位 |
|---------------------------------------|------------------|------------------------|---------|
| センター長 | 早川 岳人 | 衣笠総合研究機構 | 教授 |
| 運営委員 | 中村 正 | 産業社会学部 | 教授 |
| | 松田 亮三 | 産業社会学部 | 教授 |
| | サトウ タツヤ | 総合心理学部 | 教授 |
| 学内教員 (専任教員、研究系教員等) | 開沼 博 | 衣笠総合研究機構 | 准教授 |
| | 山口 洋典 | 共通教育推進機構 | 准教授 |
| | 中妻 拓也 | 総合心理学部 | 助手 |
| 学内の若手研究者 | 専門研究員・研究員 | | |
| | 補助研究員・リサーチアシスタント | | |
| | 大学院生 | | |
| | 学振特別研究員(PD・RPD) | | |
| その他の学内者 (非常勤講師・研究生・研修生等・博士前期課程院生等) | | | |
| 客員協力研究員 | 日高 友郎 | 衣笠総合研究機構 地域健康社会学健康センター | 客員協力研究員 |
| | 川本 静香 | 立命館グローバル・イノベーション研究機構 | 客員協力研究員 |
| | 高山 一夫 | 衣笠総合研究機構 人間科学研究所 | 客員協力研究員 |
| その他の学外者 (他大学教員・若手研究者等) | | | |
| 研究所・センター構成員 計 10 名 (うち学内の若手研究者 計 0 名) | | | |

III. 研究業績

本欄には、「II. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2019年3月31日時点)

| 1. 著書 | | | | | | | |
|-------|-------|-------------------------|---------|----------|-------------------------------|-----------|-------|
| No. | 氏名 | 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行年月 | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | その他編者・著者名 | 担当頁数 |
| 1 | 早川 岳人 | 今を知ろう【「データから今を知る」ということ】 | 共著 | 2018年10月 | 保健師のためのデータ活用ブック. 中板育美編著, 東京図書 | | 24-29 |

| | | | | | | | |
|----|-------------|---|----------|----------|--------------------|--|---|
| 2 | 中村 正 | 治療的司法の實踐- 更生を見据えた刑事 弁護のために | 分担執 筆 | 2018年10月 | 第一法規 | 指宿信監修・治療 的司法研究会編 著 | 1-41, 349-366, 444-463 |
| 3 | 中村 正 | “教育から学習への 転換”のその先へ -Unlearningを焦点 に大学教育を構想す る- | 共著 | 2019年3月 | 文理閣 | 景井充、杉野幹人 | 84-151 |
| 4 | 松田 亮三 | Health System in Japan. In: van Ginneken E., Busse R. (eds) Health Care Systems and Policies. Health Services Research. | 分担執 筆 | 2018年7月 | Springer, New York | | https://doi.org/10.1007/978-1-4614-6419-8_12-1 |
| 5 | サトウ タ ツヤ | 対話を起こし、プロ セス理解を支援、振 り返りを促進する一 質的アプローチのい かされ方 (中坪史典 (編), 質的アプロ ーチが拓く「協働 型」園内研修をデザ インするー保育者が 育ち合うツールとし てのKJ法とTEM) | 共著 | 2018年5月 | ミネルヴァ書店 | 安田裕子 | 211-221 |
| 6 | サトウ タ ツヤ | 本書を読み終えたみ なさんへ (中坪史典 (編), 質的アプロ ーチが拓く「協働 型」園内研修をデザ インするー保育者が 育ち合うツールとし てのKJ法とTEM) | 共著 | 2018年5月 | ミネルヴァ書店 | 安田裕子 | 237-241 |
| 7 | サトウ タ ツヤ | 質的心理学辞典 | 編著 | 2018年11月 | 新曜社 | 能智正博・香川秀 太・川島大輔・柴 山真琴・鈴木聡志 (編集) | |
| 8 | サトウ タ ツヤ | 文化心理学 | 共編著 | 2019年3月 | ちとせプレス | 木戸彩恵 | |
| 9 | サトウ タ ツヤ | 文化心理学の歴史 木戸彩恵・サトウタ ツヤ (編)『文化心 理学』 | 単著 | 2019年3月 | ちとせプレス | | 15-26 |
| 10 | サトウ タ ツヤ | 記号という考え方 木戸彩恵・サトウタ | 単著 | 2019年3月 | ちとせプレス | | 27-39 |

| | | | | | | | |
|----|---------|---|------|---------|-------------|--|---------|
| | | ツヤ (編)『文化心理学』 | | | | | |
| 11 | サトウ タツヤ | 時間と記号 木戸彩恵・サトウタツヤ (編)『文化心理学』 | 単著 | 2019年3月 | ちとせプレス | | 41-51 |
| 12 | 山口 洋典 | 「海外から見た日本の市民活動って?」『京都発 NPO 最善戦: 共生と包摂の社会へ』 | 分担執筆 | 2018年6月 | 京都新聞出版センター | | 63-65 |
| 13 | 山口 洋典 | 「べき、と、である、を結ぶ。 : 目標と現状の整合による力量の向上のために」『アート NPO データバンク 2018-19: 実践編! アートの現場からうまれた評価』 | 分担執筆 | 2019年2月 | アート NPO リンク | | 133-146 |

| 2. 論文 | | | | | | | | |
|-------|-------|---|---------|---------|--|--|---------|------|
| No. | 氏名 | 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行年月 | 発行所、発表雑誌、巻・号数 | その他編者・著者名 | 担当頁数 | 査読有無 |
| 1 | 早川 岳人 | Characteristics of facial expression recognition ability in patients with Lewy body disease | 共著 | 2018年7月 | Environmental Health and Preventive Medicine 23:32. doi.org/10.1186/s12199-018-0723-2 | Kojima Y., Kumagai T., Hidaka T., Kakamu T., Endo S., Mori Y., Tsukamoto T., Sakamoto T., Murata M., Hayakawa T., Fukushima T. | | |
| 2 | 早川 岳人 | Predicting falls from behavioral and psychological symptoms of dementia in older people residing in facilities. | 共著 | 2018年7月 | Geriatrics Gerontology. DOI: 10.1111/ggi.13528 | Sato S., Kakamu T., Hayakawa T., Kumagai T., Hidaka T., Masuishi Y., Endo S., Fukushima T. | | |
| 3 | 早川 岳人 | Life in company dormitories and a career change are associated with anxiety over lack of | 共著 | 2018年9月 | J Occup Health. 60(5) | Hidaka T., Kakamu T., Endo S., ato S., Masuishi Y., Kumagai T., Nakano S., | 361-368 | |

| | | | | | | | | |
|----|-------|--|----|----------|-------------------------|----------------------------|----------|--|
| | | privacy among radiation decontamination workers in Fukushima Prefecture, Japan | | | | Koyama K., Fukushima T. | | |
| 4 | 早川 岳人 | 循環器疾患予防 を通じた地域健 康づくり活動. 特集 循環器疾患 を予防する 「公衆衛生」 | | 2019年3月 | 医学書院 | | 380-384 | |
| 5 | 中村 正 | 暴力は多様な顔 をして関係性に 宿ることを読み 解く | 単著 | 2018年4月 | 家族療法研究(35巻1号) | | 59-64 | |
| 6 | 中村 正 | 臨床社会学の方 法(21)生活世界 -街の人びとの生 きられた世界- | 単著 | 2018年6月 | 対人援助学マガジン(9巻1 号) | | 22-31 | |
| 7 | 中村 正 | 妄想=暴走する男 たち-ハラスメ ントの要の位置 にある男性性ジ ェンダー | 単著 | 2018年9月 | 臨床心理学(18巻5号) | | 561-565 | |
| 8 | 中村 正 | 臨床社会学の方 法(22)暴力の遍 在と意識化 | 単著 | 2018年9月 | 対人援助学マガジン(9巻2 号) | | 23-32 | |
| 9 | 中村 正 | つながりすぎな いこと | 単著 | 2018年10月 | 青少年問題(65巻秋季(第 672)号) | | 2-9 | |
| 10 | 中村 正 | 治療的司法・正義 の理論のために- ケアとジャステ イスの統合をと おした問題解決 のための理論・実 践・制度 | 単著 | 2018年10月 | 法と心理(18巻1号) | | 1-3、6-13 | |
| 11 | 中村 正 | 親しい関係性に やどる暴力につ いて -DVを中 心に- | 単著 | 2018年12月 | 人権と部落問題(70巻12号) | | 38-45 | |
| 12 | 中村 正 | 臨床社会学の方 法(23)暴力を認 めるが加害を認 めない人々との | 単著 | 2018年12月 | 対人援助学マガジン(9巻3 号) | | 21-30 | |

| | | | | | | | | |
|----|---------|---|-----|----------|-------------------------------|--------------|---------|--|
| | | 対話 | | | | | | |
| 13 | 中村 正 | 暴力の遍在と偏在—その男の暴力なのか、それとも男たちの暴力性なのか— | 単著 | 2019年2月 | 現代思想(47巻2号) | | 64-76 | |
| 14 | 中村 正 | 臨床社会学の方法(24)暴力を乗り越える | 単著 | 2019年3月 | 対人援助学マガジン(9巻4号) | | 20-29 | |
| 15 | 松田 亮三 | 医療福祉政策研究への多様なアプローチ—特集にあたって | 単著 | 2019年3月 | 医療福祉政策研究(2巻1号) | | 1-2 | |
| 16 | 松田 亮三 | 医療福祉政策研究への多様な接近—展望 | 単著 | 2019年3月 | 医療福祉政策研究(2巻1号) | | 3-14 | |
| 17 | 松田 亮三 | 書評：田宮菜奈子・小林廉毅編『ヘルスサービスリサーチ入門』 | 単著 | 2019年3月 | 医療福祉政策研究(2巻1号) | | 137-138 | |
| 18 | 松田 亮三 | 刑事収容施設における医療アクセス・質保証に向けて—医療政策・機構研究からの検討— | 単著 | 2019年3月 | 立命館産業社会論集(54巻4号) | | | |
| 19 | サトウ タツヤ | マーガレット・ナウムブルグ心理学史の中の女性たち第7回 | 単著 | 2018年4月 | 心理学ワールド(81号) | | 29 | |
| 20 | サトウ タツヤ | 文化と記号と心理学 | その他 | 2018年6月 | 対人援助学マガジン(33号) | | 108-117 | |
| 21 | サトウ タツヤ | Wilhelm Wundt in Sendai “ - Zur Geschichte der Psychologie in Japan | 共著 | 2018年7月 | Psychologische Rundschau(69巻) | Uwe Wolfradt | 169-169 | |
| 22 | サトウ タツヤ | ボランティアと連携した学級復帰の支援体制づくり—全日制単位制高校におけるフィールドワーク | 共著 | 2018年9月 | 教育心理学研究(66巻) | 神崎真実 | 241-258 | |
| 23 | サトウ タツヤ | 国際心理学会の提唱者オコロビッツ(ポーランド) | 単著 | 2018年10月 | 心理学ワールド(83号) | | 29 | |
| 24 | サトウ タツヤ | 取調べ録画動画の提示方法が自白の任意性判断 | 共著 | 2018年10月 | 法と心理(18巻) | 中田友貴・若林宏輔 | 70-85 | |

| | | | | | | | | |
|----|---------|--|----|----------|--|-----------------------------|---------|--|
| | | に及ぼす影響 ー日本独自の二 画面同時提示方 式と撮影焦点の 観点からー | | | | | | |
| 25 | サトウ タツヤ | ナラティブの意 義と可能性 | 単著 | 2018年12月 | 言語文化教育研究(16巻) | | 2-11 | |
| 26 | サトウ タツヤ | 質的データの可 視化支援ツール 「NARREX」の開 発ーKJ法経路の TEMとそれをサ ポートする方法 について | 共著 | 2019年1月 | 立命館人間科学研究(38巻) | 斎藤進也・安田 裕子・隅本雅 友・菅井育子 | 111-120 | |
| 27 | サトウ タツヤ | 万歳三唱令 文書 流言か文化創造 か 対人援助学& 心理学の縦横無 尽 (24) | 単著 | 2019年3月 | 対人援助学マガジン(36号) | | 113-118 | |
| 28 | 山口 洋典 | PBLの風と土： (5)現在進行形 の問題に向き合 う学びの視点 | 単著 | 2018年6月 | 対人援助学マガジン(9巻1 号) | | 282-287 | |
| 29 | 山口 洋典 | 学びのコミュニ ティ：プロブレ ム・ベースド・ ラーニング | 単著 | 2018年7月 | 2017年度「コミュニ ティ・デザイン論研究」レクチャ ー・ドキュメント「社会の 構造的な問題へ多分野の知で アプローチする」(大阪ガス CEL)(8巻) | | 1-5 | |
| 30 | 山口 洋典 | PBLの風と土： (6)学びの場の プロセスをデザ インする戦略 | 単著 | 2018年9月 | 対人援助学マガジン(9巻2 号) | | 278-283 | |
| 31 | 山口 洋典 | Communication- design for Disaster Risks through Shopping at a Large-scale Shopping Center: Transition from Disaster Prevention to Disaster Mitigation | 共著 | 2018年11月 | Journal of Integrated Disaster Risk Management(8巻1号) | Naoko Horie | 22-45 | |

| | | | | | | | | |
|----|-------|---|----|----------|-----------------|------------------------------------|---------|--|
| 32 | 山口 洋典 | The generative power of metaphor: long-term action research on disaster recovery in a small Japanese village. | 共著 | 2018年11月 | Disasters | ATSUMI Tomohide and SEKI Yoshihiro | | |
| 33 | 山口 洋典 | PBLの風と土：(7)どのように問題を設定するかという問題 | 単著 | 2018年12月 | 対人援助学マガジン(9巻3号) | | 223-228 | |
| 34 | 山口 洋典 | メゾレベルなボランティア学を求めて：特集「主体的な学びを拓くボランティア学」の企画趣旨 | 共著 | 2019年2月 | ボランティア学研究(19巻) | 桑名 恵・阿部 健一・竹端 寛・玉城 直美・福永 敬・高橋 真央 | 3-6 | |
| 35 | 山口 洋典 | 参加型学習における問題解決活動と教育実践の相即：立命館大学とデンマーク・オールボー大学との比較研究を通じた理論と方法論の検討 | 単著 | 2019年2月 | ボランティア学研究(19巻) | | 7-22 | |
| 36 | 山口 洋典 | PBLの風と土：(8)指導の不安と不満で学生を抑えぬように | 単著 | 2019年3月 | 対人援助学マガジン(9巻4号) | | 240-245 | |
| 37 | 山口 洋典 | メタファーを通じた災害復興支援における越境的対話の促進—新潟県小千谷市塩谷集落・復興10年のアクションリサーチから | 共著 | 2019年3月 | 質的心理学研究(18巻) | 渥美公秀・関嘉寛 | 124-142 | |

| 3. 研究発表等 | | | | | |
|----------|------|------------|---------|---------------------|---------|
| No. | 氏名 | 発表題名 | 発表年月 | 発表会議名、開催場所 | その他発表者名 |
| 1 | 中村 正 | 加害者臨床とパーソン | 2018年8月 | 日本パーソナリティ心理学会第27回大会 | |

| | | | | | |
|----|---------|---|----------|--|-----------------------------------|
| | | ナリティ研究の対話 | | | |
| 2 | 中村 正 | 性暴力加害者をなくすための「教育」からみた支援-「ジャスティスクライアント」とともに | 2018年9月 | 第38回日本性科学学会学術集会 | |
| 3 | 中村 正 | 男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために(その7)-脱男性性をめぐるラビリンス(迷宮)- | 2018年11月 | 対人援助学会第10回大会 | 國友万裕 |
| 4 | 中村 正 | 企画ワークショップ III 「被災と復興の証人(witness)になる」とはどういうことだったか? ~「東日本・家族応援プロジェクト」の活動を通して/「記憶の多様なかたち~震災・災害の表象論から」 | 2018年11月 | 対人援助学会第10回大会 | |
| 5 | 松田 亮三 | イタリア医療機構の概要 | 2018年6月 | イタリア家庭医と日本の開業医の未来 | |
| 6 | 松田 亮三 | How a complex financial system mediates politics: an analysis of the Statutory Health Insurance System in Japan | 2018年7月 | The 25th IPSA World Congress of Political Science, RC25.03 Conference in a Conference: International Comparison of Health Policies and Politics | |
| 7 | 松田 亮三 | エビデンスと政策—批判的実在論からの検討 | 2018年11月 | 第3回批判的実在論研究会 | |
| 8 | 松田 亮三 | 刑務所医療改革—国際的動向と日本の課題 | 2018年12月 | 日本医療福祉政策学会第2回研究大会 | |
| 9 | 松田 亮三 | Gradual Tunings for Sustainability: The Japanese Healthcare Reform since the Late 1980s | 2019年2月 | Japanese Welfare Model: Continuities and Changes during "the Lost Two Decades" : A Workshop | |
| 10 | 松田 亮三 | Universalism under Pressure: The Changing Role of the State in the French and Japanese Healthcare System | 2019年2月 | Japanese Welfare Model: Continuities and Changes during "the Lost Two Decades" : A Workshop | Monika Steffen |
| 11 | 松田 亮三 | Japanese Welfare Model: Continuities and Changes during "the Lost Two Decades" | 2019年2月 | Japanese Welfare Model: Continuities and Changes during "the Lost Two Decades" : A Workshop | Masato SHIZUME and Masatoshi KATO |
| 12 | サトウ タツヤ | 「大学生のやる気はなぜなくなるの | 2018年11月 | 日本質的心理学会第15回大会 | 田中文昭・張曉紅・浅瀬万里子・安田裕子・神崎真実・土元哲平・菅井育 |

| | | | | | |
|----|---------|--|-------------|---|---|
| | | か？」複線径路等至性モデリング (TEM) による検討 ——マツダ株式会社・立命館大学による共同研究「質的研究アナリスト体験型育成プログラムの開発」によるTEM 院生版 PBL(A 班) からの学び—— | | | 子・隅本雅友 |
| 13 | サトウ タツヤ | 大学生のやる気はなぜなくなるのか？どのようにしてなくなるようにできるのか？ ——TEA による検討—— | 2018 年 11 月 | 日本質的心理学会第 15 回大会 | 岡野雄気・若杉美穂・菱ヶ江恵子・安田裕子・神崎真実・土元哲平・菅井育子・隅本雅友 |
| 14 | サトウ タツヤ | 自傷行為を行う生徒と関わる担任教師に対する支援のあり方ー複線径路・等至性モデリング (TEM) による分析 | 2018 年 11 月 | 日本質的心理学会第 15 回大会 | 守屋彩加・川本静香 |
| 15 | サトウ タツヤ | 避難区域外での行動選択と支援に関する研究ー福島県の住民の語りからー | 2018 年 11 月 | 日本質的心理学会第 15 回大会 | 有澤清香・川本静香 |
| 16 | サトウ タツヤ | Dialogue with “Voices of the Analysis” in Transition :The Perspective from Multi-voicedness | 2019 年 3 月 | The 1st Transnational Meeting on Trajectory Equifinality Approach | Tsuchimoto, T |
| 17 | サトウ タツヤ | Fifteen years of Trajectory Equifinality Approach | 2019 年 3 月 | The 1st Transnational Meeting on Trajectory Equifinality Approach | |
| 18 | 山口 洋典 | Cultivate writing habit for the reflective and active learner in service-learning curriculum: by presenting prompts and 3 principals | 2018 年 7 月 | International Association for Research on Service-Learning & Community Engagement (IARSLCE) 2018 Conference | Megumi AKIYOSHI, Toru KAWAI, Mitsuru KIMURA, Seishi MIYASHITA |
| 19 | 山口 洋典 | 越境的対話のグループ・ダイナミック | 2018 年 9 月 | 日本グループ・ダイナミクス学会第 65 回大会 | 山口 (中上) 悦子・香川秀太 |

| | | | | | |
|----|-------|---|---------|------------------|----------------------------|
| | | ス：活動理論のその先をめぐって | | | |
| 20 | 山口 洋典 | グローバル化と相即するコミュニティラジオの可能性：偽装と棄却される人々を犠牲としないために | 2019年2月 | 国際ボランティア学会第20回大会 | 宗田勝也 |
| 21 | 山口 洋典 | 当事者研究される側とする側との分断に関する一考察：拠点での活動と日常生活との乖離へのまなざし | 2019年2月 | 国際ボランティア学会第20回大会 | 赤瀬章 |
| 22 | 山口 洋典 | 企画セッション「ボランティア学研究（の未来）を読む」 | 2019年2月 | 国際ボランティア学会第20回大会 | 高橋真央・桑名恵・玉城直美・阿部健一・竹端寛 |
| 23 | 山口 洋典 | 学生とともに紡ぐわたしたちの未来：「教育とICTの可能性」「多文化共生・難民」「社会企業/起業」「NPOの未来」「ジェンダーと開発」 | 2019年2月 | 国際ボランティア学会第20回大会 | カルロス・ペリス、狩野剛、堀江正伸、桑名恵、藤掛洋子 |
| 24 | 山口 洋典 | コミュニティ間を有機的に繋ぐ人材育成を目指してーサービスラーニング、多文化間教育、地域日本語教室での実践省察から考える市民性教育に向けての現実と課題ー | 2019年3月 | 言語文化教育研究会第5回年次大会 | 北出慶子・遠山千佳・平野莉江子・村山かなえ |

4. 主催したシンポジウム・研究会等

| No. | 発表会議名 | 開催場所 | 発表年月 | 来場者数 | 共催機関名 |
|-----|--|--------------------|-------------|------|-------|
| 1 | 「医師 早川一光を語る会 ～西陣の医療から総合人間学へ～」 | 立命館大学朱雀キャンパス5階大ホール | 2018年12月15日 | 500 | |
| 2 | 医療・福祉問題研究会 特別例会 「アメリカにおけるリプロダクティブヘルス サービスへのアクセスと低所得者へのケアー価値観・宗教・国民の間にある神話の影響」 | 教育 | 2018年12月16日 | 50 | |

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）

| No. | 氏名 | 研究業績名 | 発表場所等 | 研究期間 |
|-----|---------|--|-------------------|-------------|
| 1 | サトウ タツヤ | 東日本大震災と心理学：人生 径路の問題 | 立命館大学梅田キャンパス | 2017年1月18日～ |
| 2 | サトウ タツヤ | 第2回 双葉郡住民実態調査 調査報告書 | うつくしまふくしま未来支援センター | 2018年1月31日～ |
| 3 | サトウ タツヤ | ものづくり企業が注目する質 的研究法 人々の願いを明ら かにする TEM | 認定心理士の会近畿支部シンポジウム | 2018年3月3日～ |
| 4 | サトウ タツヤ | 文書流言か 文化創造か？ 万歳三唱令を考える | 熊本日日新聞 文化面 | 2018年3月10日～ |

6. 受賞学術賞

| No. | 氏名 | 授与機関名 | 受賞名 | タイトル | 受賞年月 |
|------|----|-------|-----|------|------|
| 該当なし | | | | | |

7. 科学研究費助成事業

| No. | 氏名 | 研究課題 | 研究種目 | 開始年月 | 終了年月 | 役割 |
|-----|--------|--|--------------------------|---------|---------|----|
| 1 | 早川 岳人 | 「医療情報の高度利用による健康寿命予測推定モデルの 構築と健康寿命の推計に関する研究」 | 基盤研究(C) | 2015年4月 | 2019年3月 | 代表 |
| 2 | 早川 岳人 | 地域住民における詳細な認知機能検査結果と十年間の認 知症、要介護リスクとの関連分析 | 基盤研究(C) | 2016年4月 | 2019年3月 | 分担 |
| 3 | 中村 正 | 親密な関係における暴力加害者の特徴と暴力から離脱す る過程の臨床社会学的研究 | 基盤研究(C) | 2015年4月 | 2019年3月 | 代表 |
| 4 | 中村 正 | レジリエンスを引き出す災害後のコミュニティ支援モデ ルの構築 | 基盤研究(C) | 2016年4月 | 2019年3月 | 分担 |
| 5 | 松田 亮三 | 多面的な地域特性からみた近隣健康格差とその動態解析 | 基盤研究(B) | 2015年4月 | 2019年3月 | 分担 |
| 6 | 松田 亮三 | 変動する社会における社会保障公私ミックスの変容—量 質混合方法論による接近 | 基盤研究(B) | 2014年4月 | 2019年3月 | 代表 |
| 7 | サトウタツヤ | 裁判員裁判の評議デザイン—評議におけるストーリーの構 築過程と法実践手法の解明 | 基盤研究(B) (特設) (基 金) | 2017年7月 | 2020年3月 | 分担 |
| 8 | 山口 洋典 | 市民性涵養の関係性モデルを軸とした地域参加学習カリ キュラムと教授法の開発 | 基盤研究(C) | 2018年4月 | 2023年3月 | 代表 |

8. 競争的資金等(科研費を除く)

| No. | 氏名 | 研究課題 | 資金制度・研究費名 | 採択年月 | 終了年月 | 役割 |
|-----|-------|--|---|----------|---------|----|
| 1 | 早川 岳人 | 新旧(1980-2020年)のライフスタイルか らみた国民代表集団大規模コホート研究： NIPPON DATA80/90/2010/2020 | 厚生労働行政推進調査事業費 | 2018年4月 | 2021年3月 | 分担 |
| 2 | 中村 正 | 多様化する嗜癖・嗜虐行動からの回復を 支援するネットワークの構築 | 国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター 戦略的創造研究推進事業 | 2016年10月 | 2019年3月 | 分担 |

9. 知的財産権

| No. | 氏名 | 名称 | 出願人 区分 | 発明人 区分 | 出願番号 | 公開番号 | 登録（特許）番号 | 国 |
|------|----|----|-----------|-----------|------|------|----------|---|
| 該当なし | | | | | | | | |